

小児科での実習を終えて

あかりこどもクリニック 3年 HY

あかりこどもクリニックでの実習を通じて、子供を診るということは、医学的な知識や観点だけでなく、想像以上に多くの視点から診る力が求められるのだということを実感した。今回は午前中に診療の見学、午後は壬生町の10ヶ月健診に同行させて頂いた。診察時には、年齢はもちろん、家庭環境や生活背景などの要因にも目を向ける必要があり子供1人1人に寄り添った診療が必要だけでなく、安心して受診ができるよう、クリニックの内装やスタッフの方々全員の対応方法には多くの工夫があることも学ぶことができ、小児医療の奥深さを実感した。そして将来小児科医を目指している自分にとって、今回の経験は大きな学びになり、求められる知識や技能だけでなく、同時に小児科医の担う役割の広さも感じる事ができた。

実習を通じて特に印象深かったのは、小児の診察は大人に対する診療とは異なり、自分の症状を自分の言葉で伝えられない子供を相手に行うため、診察時には、その時に見られる身体初見だけに目を向けるのではなく、普段の生活の様子や家庭環境、保護者からの情報、そして診察時に見られる子供の言動や様子など非言語的な要素などを踏まえた上で、総合的に判断していく力が求められるという点である。実際の診療では、患者本人である子供に対する問診はもちろんであるが、保護者からの情報を丁寧に聞き取りと同時に、限られた時間の中で子供の様子を細かく観察しながら診療が行われていた。先生は問診などで得られる情報を最大限活用し、触診や聴診器などの医療器具は子供が落ち着いてから、最後に行っていた。情報を得るために、初めから聴診器等をいきなり使うのではなく、なるべく話から推測し、聴診器は最後、という診療を見学する中で、診療の進め方に細やかな配慮がなされており、病気だけでなく、診療方法や順番にも小児科の特有性を感じる事ができた。更に、先生は病気の説明を行う際、言葉だけで説明するのではなく、図などを使いながら、患者である子供、そして保護者の方の目を見ながら丁寧に説明されていたのが印象に残った。しかし、説明を行いながらも、1つの診断に固執し、決めつけるのではなく、教科書通りに当てはまらない場合でも、無理に押し付けるのではなく、子供1人1人に合わせた多様な可能性を考慮しつつ対応されていたことが印象に残っている。例えば、アレルギーの有無を考えると、同じ物質であってもその子がどのような状況で、どのくらいの量で症状が出るのかは1人1人異なる。だからこそ、一括りにするのではなく、広い視野を持って対応していく力が小児科医には求められるのだと強く感じた。そして、子供は不安を感じやすいということ、患者さんに小さい兄弟がいる場合は、患者自身は子供1人であっても、一緒に来ていることなどもあり、診察時間が限られてくるため、診察をできるだけ早くそして正確に行うために、子供が安心できるような声かけや表情、また、看護師の方々が、一緒に来ている子供を代わりに抱っこするなど、スタッフの方全員で診察を行っていることが印象的であった。また、子供の不安を和らげられるように、注射などの後に貼る絆創膏に、キャラクターの絵が描かれており、私自身も書かせて頂いた。想像以上に1つ1つ書くのは大変だったがこうした小さな工夫が子供に安心感を与えているのだと実感した。そして、こうした現場を目の当たりにし、医療の中でも特に小児医療は、医師1人だけで行えるものではなく、看護師や事務のスタッフの方々など多職種が連携しながら関わり合うことで初めて行うことができるのであるのだと

感じた。特に小児の医療では、子供への安心感や保護者からの信頼が診療の質に大きく関わってくるため、診察室の雰囲気や兄弟への配慮など周囲との協力が不可欠なのである。このように、小児医療においては、医学的な知識や技術、判断力はもちろんであるが、子供自身や家族の不安に寄り添う姿勢、そして周囲のスタッフとの連携によって安心できる診療環境と、患者との信頼関係を築いていくことが重要であるということを実感し、医療者としての人間性やチームワークが大きく必要とされる分野であると強く感じた。

午後の検診に同行させていただいた際には、小児科医が果たす役割は、病気の診断や治療だけでなく、地域の子供たちの成長を継続的に見守るといった予防的な側面も持ち合わせているのだということに気付かされた。健診では、保健師の方と、体重や身長などの発達の確認や、その時点での正しい反応ができるかどうか、そして、育児をするなかで困っていることはありませんか、といった声かけがされていて、子供だけでなく、家庭全体に目を向けて行われていた。また、復職等を検討している保護者の方に対しては、預け先や保育園が決定しているかどうかなど、現状だけでなくその先のことにも目をむけ、話をしており、医療的な視点だけでなく社会的背景や家庭環境にも踏み込んで支援が行われており、小児科医としての役割は単なる病気の治療ではなく、子供とその暮らし全体を支える包括的な医療であることを強く感じた。また、保健師の方や、待ち時間に子供に向けて本を読んでいるボランティアスタッフの方々など様々な方との連携のもと、保護者の悩みに丁寧に耳を傾け、場合によっては他の医療機関との繋がりや提案など、地域と子供をつなぐ橋渡しとしての役割も担っていた。このように、子供が健康的に、健やかに育つことができるよう、家族を含め、小児科医は地域の中で重要かつ大きな役割を担っていることを実感することができた。

今回の実習を通じて、小児医療が単に病気を診断する場所ではなく、子供の成長や保護者などの家族の様子を含め、地域全体を支える役割があるのだということ深く学ぶことができた。そして、子供を相手に診療を行うため、限られた情報から総合的に判断する力や子供だけでなく、保護者との信頼を築く力、そして、多職種との連携、そして地域全体への視野も欠かすことができない職業であると実感した。小児科医を目指すものとして、医学的知識や技術だけでなく、子供と家族に寄り添い、他の職業と協力し合いながら、子供たちが安心して過ごすことができる環境に貢献できるような医師になれるよう、今後も学びを積み重ねていきたい。

最後にはなりますが、今回の実習を通じて貴重な学びの機会を与えて下さったあかりこどもクリニックの先生方、スタッフの皆様にご心より感謝申し上げます。お忙しい中、丁寧にご指導いただき本当にありがとうございました。今回の経験を今後の学びにしっかり活かし、医師として成長していけるよう努めてまいります。